

職場で肝炎ウイルス検査を

がん社会 を診る

中川 恵一

ウイルス感染によって発生するがんの代表が肝臓がん
で、原因の7割近くがB型、
C型の肝炎ウイルスです。

B型肝炎ウイルス(HBV)
は感染力が強く、輸血の他、
母子感染や注射器の使い回
し、性行為など、さまざま
な感染ルートを持っています。

HBVの保有者(キャリア)
のうち10〜15%が慢性肝炎を
発症し、さらに一部が、肝硬
変、肝細胞がんに行進します。

日本の肝臓がんの約15%はH
BVが原因です。

肝臓がんの原因の6割近く
を占めるのがC型肝炎ウイル
ス(HCV)の感染です。こ
のウイルスは、コロナウイル
スと同じく、一本鎖RNAウ
イルスの仲間です。このウイ
ルスが血液を介して感染する
と、肝硬変や肝臓がんにつな
がります。しかし、輸血用血
液からのウイルスの除去が進
み、このウイルスによる発がん
は減少に転じています。

すでに感染している人
も、「抗ウイルス剤」によっ

て、HCVはほぼ100%体
内から排除できるようになっ
ています。

C型肝炎の特効薬は、副作
用がほとんどない飲み薬で、
米メルクの「ラゲブリオ」、
米ファイザーの「パキロビツ
ドパック」といったコロナ治
療薬にも、その開発技術が応
用されています。

HCVの感染があっても、
なるべく若い年齢でウイルス
を排除すれば、肝臓がんの発
症リスクを大きく低下できる
ようになりました。

B型肝炎に対する飲み薬も
普及しており、発がんリスク
を抑えられるようになってい
ます。

2009年に制定された肝
炎対策基本法により、保健所
や指定医療機関でB型、C型
の肝炎ウイルスの感染の有無
を無料で検査できるようにな
っています。

しかし、働く世代の肝炎ウ
イルス検査が停滞しており、
問題です。労働安全衛生法に
基づく定期健康診断で毎年、
血液検査が行われますが、肝
機能に関する検査項目はあつ
ても、肝炎ウイルスについて
の項目はないためです。職域
での肝炎検査は全労働者の5
%にとどまっています。

とくに、C型肝炎では、成
人になってからの感染はまず
ありませんから、毎年の検査
は必要なく、一生に一度の検
査で十分です。

新入社員の入社時や、5歳
刻みの年齢の血液検査に、同
意の上、肝炎ウイルスの項目
を追加するのが簡便だと思ひ
ます。

肝臓がんは毎年3万8千人
以上が罹患(りかん)し、2
万5千人もの命を奪っていま
す。5年生存率も36%と難治
性のがんですから、その予防
はとても大切だと言えるでし
ょう。職場での肝炎ウイルス
検査の普及が強く望まれま
す。(東京大学特任教授)



イラスト 中村 久美